特選「私が嫌いなもの」

私が嫌いなもの、それは人前で話すことや自己紹介、教科書の朗読、接客、面接、虫、カラオケ、話を最後まで聞いてくれない人、そして自分自身だ。

私は吃音症という発達障害をもっている。話す時に最初の一音が喉奥にべたりと張り付いたかのように出ない難発や、同じ言葉を繰り返したりする連声など種類は様々だ。吃音という言葉はまだ多くの人には知られていない。まして知り合いや友達に吃音者がいない限り、吃音について耳にすることはないだろう。

小学校五年生の時、同学年の生徒の前で修学旅行の感想を発表する機会があった。担任の先生や母親とも一生懸命練習した。当日、それは失敗に終わった。言葉が出なかったのだ。ひたすら出にくい言葉の前に「えっと、あの、んっと」と言葉が出やすくなる魔法の言葉を唱える。マイクが全ての音を拾う。恥ずかしかった、声も手も震え、まるでそこに自分ひとりしかいないかのような世界に放り出された気分だった。ニコニコとした顔でビデオカメラを構えていた母親はその時初めて、私が吃音症であると知ったらしい。隠していた訳ではないけれど、とても申し訳なくなった。喋ることができない自分がもっと嫌いになった。

短大に入学してもこれといった変化は特になかった。それは自分自身も周りもだった。自己紹介の時には笑われて、発表したあとは真似されたりした。そして終いには「コミュ力ないよね(笑)」と悪気ないような顔で言ってくる。〝自分のことネタにして笑えるほど、私の心は強くないのよ〟と心の内ではザーザー雨を降らしているくせに、表では笑ってみせた。

私が嫌いなものは、喋り方を馬鹿にしてくる人たちではなく、吃音を理由にどこか逃げ場所を作ってしまっている自分だ。喋ることができなかったその都度自己嫌悪に陥る。けれども、吃音症だし仕方ないと自分を甘やかしてしまう。それではダメだと分かっていても今の自分にはこれが精一杯なのだ。いつか吃音症である「私」も含めて好きになる日が来るのかなと期待して、今日も一歩ずつ歩んでゆく。